

昭和62年12月10日発行(毎月2回10・26日発行)第十卷第二十三号 発行人 高橋五郎 編集人 正岡真雄 発行所 株式会社112東京都文京区音羽二丁目2番1号 TEL03・9451・2429 株式会社112東京都文京区音羽二丁目2番1号 TEL03・9451・2429 定価二五〇円

# 着々と進む国際ハイウェイ構想

# 日韓トンネルで交流しよう!

日本に一番近い外国といえば韓国。距離でいうとそう何万キロも離れていないのに、韓国との間に海があるものだから感覚としてはずいぶん遠いところにあるように思える。

事実、九州の福岡から飛行機に乗れば、わずか一時間あまり。東京から北海道に行くのとそうそう変わりはない。以外に近い外国というわけだ。

もし日本と韓国の間には海がなければ、ヨーロッパのように国から国へとクルマで移動できることになる。そんな大陸的条件だったならば、日本の文化もずいぶん違っていったんじゃないだろうか。

これまで閉鎖的ともいえた日本に、ヨーロッパのようにクルマで行ききできる交流を、とばかりに、いま21世紀に向けて新たな事業が進められている。それは日本と隣の国、韓国を結ぶ海底トンネル計画。

これは国際ハイウェイ構想の第1段階として進められているもので、今のところ基礎的な調査をしている段階だ。この計画

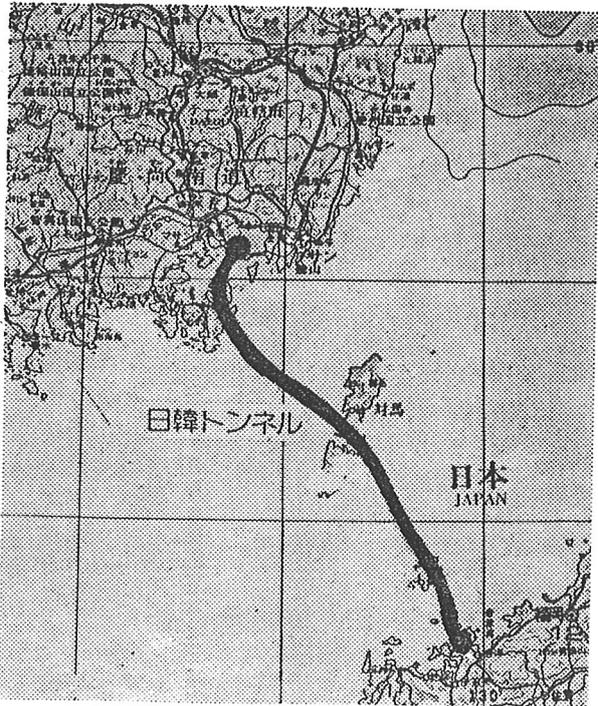
が順調に進み海底トンネルが完成したとすると、その全長は青函トンネルの約4倍にあたる235km、総工費は約6兆5000億円というものになる。

日本側の入口は唐津、韓国側の入口は釜山だ。国際ハイウェイ構想というのは、1981年、韓国はソウルで開かれた「第10回科学の統一に関する国際会議」の席上、同会議の提唱者であり、国際文化財団の創設者でもある文鮮明氏によって提唱されたもので、世界各国をハイウェイで結び、高速輸送のネットワークで全世界を一日生活圏にしようという計画だ。今回の日韓海底トンネルの計画もこの構想の下に進んでいる。

海底トンネルで日本と韓国が結ばれたとすると、気になるのは出入国の方法、ビザの発行ウンスンであるが、この構想ではハイウェイの両側1キロは国境を超越した中立地帯とし、そこを利用する人のための空港やホテルなどの施設を作るものとしている。ビザに関しては現行ど

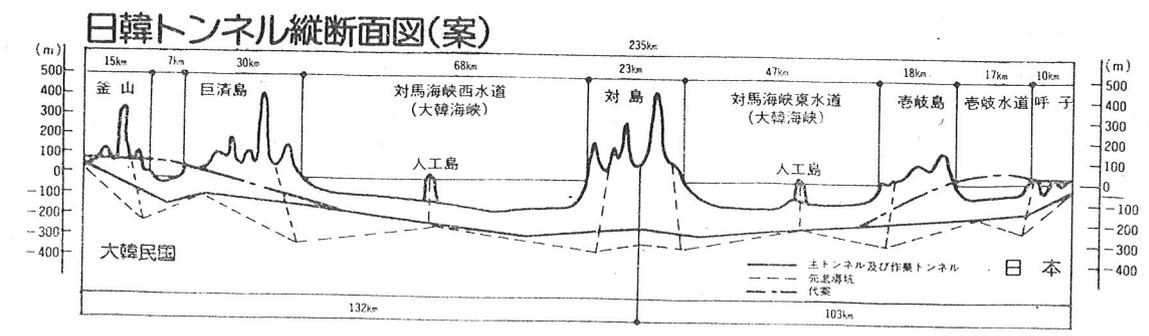
おり必要になるとのこと。そしてこの長い海底トンネルを走るものは、いまのところリニアモーターカーが有力とされている。リニアモーターカーは現段階では人乗せるレベルで開発されているが、この計画に組み込まれるとすると、乗用車やバスを運搬できる大型リニアモーターカーの開発を検討するといっている。

日韓トンネルはほぼこのルートになる



この日韓トンネルの実現に向けて、いま基礎理念、文化、設計、旅行などの各部署が同時に動いているが、今後1〜2年後には正式のルートを決出し、近い将来には具体的な本坑の掘削工事を始めるという。完成は今のところ正式ルートが決まるまで未定とのことだが、希望的には21世紀に入ることまでは完成させたいといっている。完成がいまから大いに楽しみなトンネルである。

日韓トンネルを断面で見ると



カルタスエーティオ馬カPOWERED ニューページの他に新車情報はニューページから